

説教「大祭司イエスの苦しみ」

詩編 22 編 2～12 節

1991.3.3

日本バプテスト同盟 関東学院教会

受難節第三の主の日を迎え、今朝も導かれて共に礼拝を^{ささ}げ、主に感謝いたします。皆様の上に、また御家族の上に、主の祝福が豊かにあるようにお祈りします。

世界が注目しておりました湾岸戦争は停戦となりました。しかし、その荒廃、その損失は計り知れないものがあります。この湾岸戦争は人間の罪に、兄弟が兄弟を殺すというあのカインの兄弟殺しにまで^{さかのぼ}る 私たちの内にある罪にほかなりません。誰がこの重い罪を負うことができるでしょうか。そう思うとき、私たちは、人の罪を負って十字架上で呻き苦しまれたイエス様のもとに、その十字架の下に座って、これを見つめるほかないのであります。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ 15:34) と、私たちの重い罪を負って叫ばれる その叫びに耳を傾けたいと思います。

イエスの十字架上の死が人の罪のためであったということは、教会の使徒たちが一致して告げるところです。使徒言行録の 2 章を見ますと、聖霊を注がれた弟子たちのなか、集まった人々にペトロがこう言っております。「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさった」(使徒言行録 2:36) と。すると、それを聞いて心を打たれた人たちが、「では、どうしたらよいのですか」(同 2:37) と問うた。それに答えて、ペテロは言います。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によってバプテスマを受け、罪を^{ゆる}赦していただきなさい」(同 2:38)。

パウロも、ローマ書において 次のように述べています。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる^{あがな}贖いの業を通して、神の恵みにより 無償で義とされるのです」(ローマ 3:23～24)。そして 25 節で、「神はこのキリストを立て、その血によって 信じる者のために罪を贖う供え物となさいました」(同 3:25) と教えました。パウロはまた、ローマ書 6 章 6 節 その他で、「自分がキリストと共に十字架につけられた」「十字架のキリストのほかに、福音はなかった」とも記しています。

一方、ヘブライ書を見ますと、「多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の

苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであった」(ヘブライ 2:10)、「それで、イエスは・・・忠実な大祭司となって、民の罪を贖^{あがな}うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです」(同 2:17)、「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練^あに遭われたのです」(同 4:15)とあります。このように、御自身が試練を受けて苦しまれたからこそ 試練を受けている人たちを助けることができるのであり、さらには「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ^{おそ}敬^{うやま}う態度のゆえに聞き入れられました」(同 5:7)ともある。このイエスの苦しみ、激しい叫び声に、大祭司イエスの執り成しの祈りを聞くのであります。

そこで「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」との初めの叫びですが、この叫びは 先ほど読んでいただいた詩編 22 編の冒頭の言葉からとられたものです。新共同訳によって、嘆き苦しむ詩人の言葉を味わってみましょう。

この詩編を読んでいきますと、不思議にも 福音書に示されているイエスの十字架の光景^{えが}が描き出されてきます。詩編 22 編には、「周りの人は皆、この人を見て嘲笑^{あざわら}い、唇を突き出し、頭を振る。『主に頼んで 救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら、助けてくださるだろう』」(8～9)、「口は渴いて・・・舌は上顎^{うわあご}にはり付く。・・・塵^{ちり}と死の中に打ち捨てられる」(16)、「手足を刺し貫く」(17)、「あばら骨が数えられる程になって、彼らの目にさらされる」(18)、「わたしの着物を分け、衣を取ろうとして くじを引く」(19)といったように、様々な苦しみに苛^{さいな}まれている姿が描き出されています。ここに、十字架のイエス様と詩編 22 編との深い繋がり^{つな}を見ることができるようであります。

ここで、こうした外面的な苦しみから その内面的苦しみに立ち入ってみたいと思います。詩人は 2 節で「わたしの神よ、わたしの神よ」と叫び、次の 3 節でももう一度、「わたしの神よ」と叫んでいます。「わたしの神」と呼ぶところに注目していただきたい。この病める詩人は、以下で訴えている様々な苦しみに遭^あいながらも、「あなただけがわたしの神です」と叫ぶのです。ここに、「この方以外に救いはない」と告白する真実な叫びがあります。

先ほど挙げたヘブライ人^{じん}への手紙の中で、忠実な大祭司キリストは多くの苦しみを通して 従順を学ばれた、と言われております。ここに言われる「忠実」「従順」という言葉の中には、どんな苦しみの中に突き落とされようとも、そのようにして闇と不安の中に置かれ、見捨てられたような絶望の淵^{ふち}に立たされようとも なお・・・、との意味合いがあります。「わたしの神よ」と呼ばれる詩編の言葉の内には 詩人のそのような一途^{いちず}な信仰があり、神へのその真実なる信仰が言い表わされています。そして、そのように 神に全く信頼を寄せているからこそ、「なぜ、何もしてくれないのですか」と言い、嘆き訴えて叫ぶのであります。同じように、イエス様の口にこの叫びが上ったとき、父なる

神に対する その信頼と信仰とが鋭く表わされたのでした。私たちの祈りも、漠然と神に ではなく、「わたしの神よ」と呼ぶ呼びかけでなければなりません。

次に、「なぜ、わたしをお見捨てになるのですか。お見捨てになってしまうのですか」(2) ということです。捨てられたというのが、詩人の実感だったことでしょう。この方しか頼る方はいないという、その方から見放されたと感じる。実際、これほど深い絶望感はないと思います。この感覚が次に続く言葉を語らせます。「なぜ、遠くに離れていて、救ってくれないのですか」(同)。さらに「わたしの呻きにも、なぜ答えてくれないのですか」(同)と続き、次の3節では「昼も、そして夜も呼びかけ求めているのに、何も答えてくれないじゃないですか」と畳みかけて叫んでいます。十字架上に死の苦しみを苦しんでおられたイエス様の姿が彷彿とします。イエス様のエルサレム入城を大歓迎したその人々の群衆が「十字架につけよ」と叫んだのです。それだけでなく、弟子の一人のユダに裏切られ、その声がイエス様を弁護するピラトの声を上回った。そのようにして、見事に裏切られたのでした。

孤独なイエスでした。孤独死です。孤独死というのは、当時、忌まわしいものでした。ほかの弟子たちにも逃げられてしまった。最後までついてきたペトロでさえも、土壇場になって「イエスなどという男は全く知らない」と言い張る有り様です。また、今朝の8節、9節に言われているとおりに、ユダヤの人々に嘲られ、罵られる。「お前が頼りにしている神が十字架から救ってくれるかどうか見てみよう。誰も救ってはくれないじゃないか」と言わんばかりです。すべての人から見捨てられ、外部からだけでなく、内輪からもそうされる。そのうえ、頼みの綱である「わたしの神」からも、何の応答もありません。こうして、孤独のうちに捨てられてゆくのでした。

これは一体、どういうことでしょうか。実際、この十字架上のイエス様の絶望的な叫びは忙しい日常の業に巻き込まれている私たちを立ち止まらせ、考えさせる光景ではないでしょうか。慈悲深い善い業をなし、父なる神の御旨に忠実に従っておられたイエス様がなぜこのように、誰から見ても神に見放され、捨てられた可哀そうな人となったのか。イエス様はなぜ、そして何のために、あのように苦しみつつ死んでゆかれたのだろうか。イエス様の十字架は、立ち止まる人にそのような問いを投げかけはしないでしょうか。

このように問うと、実は個人的なことで恐縮なのですが、私は自分の若き日のことを思い出すのです。その昔、孤独で灰色のような私の心が曇り空に浮かんだ十字架の人に同じ問いを投げかけたときのことです。誰かが十字架につけられて、苦しみを受けている。この人はどうして、あのように苦しんでいるのだろうか、と。そのとき、私は心に問うてみました。もしかしたら、この人はこの私のためにあのように苦しんでおられるのではないだろうか。そして、思ったのです。きっとそうかもしれない、と。そう思ったとき、私の冷えた孤独な心の奥底から何か温かいものが込み上げてきたのを

覚えています。それはやがて、私の心と体の全体を内側から温かくしてくれました。そのときから、遠い昔の人とばかり思っていたイエスという人が急に身近な人になり、私の友達なのだという実感が湧いてきたのでした。詳しいことは何も分かってはいませんでした。十字架上でただひとり苦しんでおられるイエスという人のお姿の中に、この自分という一人の男に関わってくださる そのイエス様を感じたのであります。

死に至るまで従順であられた このイエス様の中に起きている力を、福音という神の力を、皆さんが、そしてすべての人が心に深く受け止めてみる。その時が今この時期であり、受難節の時ではないかと思うのです。

今朝の詩編 22 編にはこれ以上^{こたわ} 拘りませんが、最後にあと一つ。この前取り上げた詩編 6 編と同じように、この詩も嘆きだけで終わってはおりません。絶望の叫びのなかにも、神への信頼が告白されています。11 節です。「母の胎にあるときから、あなたはわたしの神」です、と。その後はたしかに、先ほど挙げましたような様々な死の苦しみに^{さいな} 苛まれている 22 節までの言葉が続きます。ところが、23 節から一転して、主を賛美するほめたたえの言葉に変わってゆくのです。いつの時点で何が起きてそうなったのか、知ることはできません。ただ、25 節にこう語られています。「主は貧しい人の苦しみを^{あなど} 決して侮らず、さげすまれません」と。そして、「御顔を^{みかお} 隠すことなく、助けを求め^{あざけ} る叫びを聞いてくださいます」と告白しているのであります。死の苦しみのなか、人々の非難と嘲りの声のなかでもなお、「わたしの神」を呼び続けることを^や 止めなかった。この悩める人に、主はついに答えてくださった。詩人はそれを経験したのでした。どうしてこれこれしてくれないのですか、と叫び、祈り続けたとき、その祈っていた事柄に神は答えてくださった、と喜びの声を上げています。

そして、この詩人はその喜びを心の内に秘めておくことができませんでした。26 節で次のように言っています。「それゆえ、わたしは大いなる集会であなたに^{おそ} 賛美をささげ、神を畏れる人々の身になしてくださったことを語らずにはおれません」と。さらに、28 節には「地の果てまで すべての人が主を認め、^み 御もとに立ち返り・・・^{みまえ} 御前にひれ伏しますように」とあり、30 節には「地に住む人のみでなく、塵に^{ちり} 下った者もすべて ^{みまえ} 御前に身を^{かが} 屈めます」ともあります。そして 最後の 31-32 節で、「この主の^{きた} ことを^よ 来るべき代に、つまり子孫にまで^{うた} 告げ知らせよう」と詠うのであります。

この歌のとおり、十字架のイエス様は十字架の^{あがな} 贖いの業を身をもって完成され、死人から^{よみがえ} 甦られました。それは、パウロがフィリピの信徒への手紙で^{うた} 詠っているとおりです。そのところを読んで終わります。フィリピの 2 章 6 節から 11 節までです。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、^{しもべ} 僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがす

べて、イエスの^{みな}御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公^{おおやけ}に宣べて、父である神をたたえるのです」

罪のために 苦しみを死に至るまで味わい、息絶えたもうた十字架の主に、世界の望みがあります。共々、この主の^{あがな}贖いの^{みわざ}御業を受け、悔い改めて、神と和解する心が新しく与えられるように祈ってまいりましょう。